

大恩ある近藤みゆき先生へ

近藤みゆき先生のご逝去に対し心よりお悔やみ申し上げます。
ます。

「一字一句にこだわる。」

院生時代の授業ノートを見返すと、そう記してありました。みゆき先生からいただいた資料や発表原稿のお手本には、先生ご自身の書き込みもあり、まるでみゆき先生と今、お話をさせていただいているような感覚になりました。

とてもありがたいことに、みゆき先生との日野キャンパスでの思い出は数限りなくあります。出会いは、私が学部三年生の時でした。「時間割の関係で、先生のお授業を受講できないのですが、それでもみゆき先生のゼミを希望しています。いかかでしょうか。」とご相談したことが、最

飯 島 美佳子

初の会話になりました。みゆき先生は、「ご自身で勉強していただけば、大丈夫ですよ。」とおっしゃって、その寛大な対応に感謝したものでした。学部四年生の時には、「あなたのようなしつかりした方がゼミ長になってくださって良かったわ。」とお褒めの言葉を頂戴したり、大学の受験に関する私の様々な疑問や不安にも熱心に相談に乗っていただいたり、先生の沢山のご経験やご家族のお話を微笑ましく伺うこともありました。また、謝恩会散会后、「飯島さんは、修士課程でも頑張りましたよね。」とお声掛けいただき、向学心を新たにしました。その後、修士課程でもお世話になりました。特に、修士課程の二年間を先生の御側で過ごせたことは、贅沢な時間でした。研究の楽しさも厳しさもお示しいただいた臨場感あふれる毎回の授

業。修士二年生の頃、私の調査報告に不足があり、いただいた鋭い数々のご指摘は、修士課程で学ぶ意義を深く考えるきっかけになりました。写本の扱い方、話術、日頃の言葉遣い、所作等も含めて、全てみゆき先生から教えていただいたことばかりです。先生からの返信メールは毎回迅速で、常にパソコンの前にいらっしやるのではと驚かされたこともありました。修士二年生で現役合格を目指し受験した群馬県公立学校教員採用試験は不合格に終わりました。試験日程との兼ね合いから、院生発表会も取れて後期に組んでいただき臨んだ試験でしたが、それでも私の力不足でうまくいきませんでした。そこで私は、「ここまでストレートで来た自分の経歴に穴を開けたくありません。そこで、修士課程三年目も考えさせていただきます。」と浅見を申し上げたこともありました。その時の先生のお返事は、「試験の結果は大変残念なものでした。しかし、修士三年となるとそれなりの結果が要求されます。それよりは、まず今年度しっかりと修士課程を修了し、修士号を手にするのを第一にお考えになってはいかかですか？」というもので、先生のおっしゃる通りでした。また、修士二年生の後期に修士論文執筆のため連日四時間睡眠だった私は、先生の研究室に何うお約束の日ですっかり寝過ごしてしまいました。午前五時から午後五時までの十二時間眠り続けた

ため無断欠席をし、ご迷惑をおかけしたこともありました。「私の指導は、ここまでです。あとはあなた自身で完成させてみてください。」このお言葉は、修士論文後半部分の執筆時にいただいたものです。私を一人前にするための先生のご配慮であり、今もこれからも忘れることのない先生との大切な思い出です。先生は、どの学生に対しても公平な態度で接しておられました。そうしたお姿も、強く印象に残っています。ゼミ生として時に懇切丁寧に優しく、時に厳しく育てていただき、先生には感謝しかありません。

先生のおかげで無事に修士課程を修了でき、時は流れ、二〇一九年十二月八日。中学校教員に正式採用され、ちょうど十年目の私は、少年の主張全国大会に群馬県代表として出場する一環で女子生徒と共に渋谷キャンパスを訪れました。女子生徒に見聞を広げてもらおうと考えてのことでした。その日は奇しくも土曜日だったこともあり、大恩あるみゆき先生にお会いできたら、中学校教員として少しは成長したであろう私の姿をお見せできるかもしれないという期待ももっておりました。しかし、そこにみゆき先生のお姿はなく、日野キャンパスから移転し、新しくなった渋谷キャンパスを佐藤悟先生が案内されながら、「近藤先生は今、休職されているのですよ。」とご親切に教えてくださいました。「えっ、休職？やはりご病気が……。でも、

みゆき先生のことだから、きつと来年度には復職されるはず。復職された頃、またメールでご連絡を差し上げよう。」等と樂觀視してしまったのが、正直なところですよ。その後、私はこの自分の言動を猛省することになります。それは、その八日後がみゆき先生の命日になってしまったからです。全く、想像もしていませんでした。先生との今生の別れがあの時既に近づいていたことに。メールはあの日即日お送りしなければならなかったことに。

みゆき先生の教育方針の一つのように感じられる「来る者、拒まず。」の精神は、今の私の教員としての指針になっています。私を頼ってくれる限りは生徒本人のやる気を重視し、私がその生徒の実力を引き上げ育てればよいという考えに至りました。かつて、みゆき先生が不肖の私と辛抱強くしつかり向き合い、中古文学を通して教育してくださったように。私が中学生に中古文学の魅力を存分に伝えたいという思いを一層強くしたのは、そうした教えがあったからこそです。その思いは今も、私が毎年生徒に行う古典文学の授業の根底になっています。

今回、少年の主張で群馬県の頂点に立つことができたのは、この小文の初めにあるようにみゆき先生の教えの一つである「一字一句にこだわる。」を実践したからでした。古典文学とは時代背景の異なる分野ですが、生徒と私とで

一字一句にこだわって推敲したところ、考え抜いた言葉こそが最高の輝きを放っていたと、後日大会審査委員長から異例のコメントをいただきました。今から約千年前の平安時代も、そして令和の時代になった今日も、一字一句に込める人の思い、その重要性は不易なのだと思えて実感致しました。

みゆき先生との出会いがなければ、今の私はありません。「私は地元で公立中学校の教員になって、中古文学（古典文学）の魅力を生徒に教えていきたいです。これから教員になるには修士号をもっていることが理想的だとの情報を耳にしました。そのため、大学院に進学したいです。」そんな私の拙い言葉に、傾聴してくださいました。私の夢の実現に向けて、大学院の特色や各校のカラーまで事細かにご説明いただいたあの日が、つい最近のこのように思い出されます。「環境が人を育てる。」とも言いますが、抜群に調えられた環境を提供してくださいましたが、みゆき先生でした。あの日のように、まだまだ教えを請わなければならぬ私に、先生のご逝去は人生において今までに体験したことのない衝撃そのものでした。語弊を恐れずに申し上げるならば、素晴らしい業績を上げていらっしゃる偉大な先生に、一介の中学校教員とその生徒もしくは教え子とのやりとりをご報告するのは次元を異にするのでは

と思い、恐縮していました。しかし、二〇一二年に先生から拝受したメールには、「こちらこそ、これからもよろしく。」というお返事がありました。みゆき先生は学部生や院生、私は中学生とその指導対象に違いはありますが、指導対象を思う気持ちは近いものがあつたように、ようやく気付きました。そうであるならば、大学院修了後ももっともっと先生にご連絡を差し上げるべきでした。みゆき先生、先生の目に現在の私の姿はどのように映っていますか。二〇一九年十二月八日、私を東京に呼び寄せてくださったのは先生の後押しあつてのことだと存じていますが、いかがでしょうか。今となつては、これらの質問にお答えいただけなののが、非常に残念でなりません。亡くなられてなお、私の今後の成長のために改善点を見つけられるようにと、先生からお力添えいただいているように感じます。私にとって最初にお見送りした恩人が近藤みゆき先生であつたことに、先生からいただいた大恩を何一つお返しできないままの突然の今生のお別れとなつたことに、悲しみをより深くしています。学問の師だけでなく、人生の師でもある近藤みゆき先生。先生の教え子として、今後も研鑽を積むことをここにお約束致します。これまでご指導いただき、本当にありがとうございます。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

最後に、約一年遅れで近藤みゆき先生の訃報に接した私に、今回このような追悼文を執筆する機会を与えてくださった佐藤悟先生、ご連絡いただいた三好伸芳先生に感謝申し上げます。

(いじま みかこ・平成十六年度修士課程修了生)